



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	校友会誌からみた札幌農学校の校風論
Author(s)	秋月, 俊幸
Citation	北大百年史, 通説, 603-621
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30028
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p603-621.pdf



校友会誌からみた札幌農学校の校風論

秋月 俊幸

It is the only college in Japan that has the so-called "college spirit" which has been moulding the character of students ever since the distinctive impression made upon the college by the first Pres. W. S. Clark. The college is noted for making men though she has not neglected making scholars. Sons of the college are conspicuous figures everywhere throughout the Empire.

片山潜 「労働世界」第二〇号英文欄、明治三二年九月（一五日）

はじめに

明治期の日本の高等教育機関のなかで、札幌農学校が特異な地位を占めていたことはよく知られている。それは新開地北海道の開拓指導者の養成を目的として一八七六年（明治九）に開

拓使によって設立された一般教育とは別系統の学校であった。開拓使の廃止ののちは農商務省、次いで北海道庁に引き継がれ、一八九五年（明治二八）には文部省の直轄学校となったものの、その修業課程はなお他の官立学校とはかなり異なっていたのである。もともとマサチューセッツ農科大学の制度を模範として設立されたこの学校はアメリカ型のカレッジであり、卒業に際しては学士号が授与され、修業年限からみれば帝国大学とほぼ類似していたが、それは大学とは認められず、とはいっても当時の高等専門学校の範疇にも入り難いものであった。さらにこの学校には予科（予備科・予修科）がおかれ、北海道の特殊性が考慮されてやがて農芸伝習科（農芸科）のほか専門学校程度（初めは中等学校程度）の土木工学科や森林科も併設された。創設当初に教頭（実質的な校長）をはじめ本科教授の全員をアメリカから招聘して組織・教則・諸規則の決定を委ねた

ことや、事実上の創始者となったアメリカ人教頭の感化が長く影響をもつことになったのも官立学校としては珍らしいことである。

このような制度的な面にとどまらず、札幌農学校はそれがおかれた自然的・社会的環境においてもまた著しい特殊性をもっていた。明治期の北海道は開拓の進展につれて変貌を遂げながらも、なお本土とは様相を異にするうっそうたる原生林におわれ、あるいは茫漠とした原野の拡がる人口稀薄な未開の大地であり、学校のおかれた石狩川の流域にはまだ先住のアイヌ民族の住居も少なからずみられた。この地の氣候が亜寒帯に属することによって動植物の種類も本土とは異なり、冬の寒気と積雪は温暖人種の日本人の永住を長い間拒んできたものである。さらに文化的な観点からみても、道南の一部を除いては歴史と伝統をもたない全くのフロンティアであり、別の見方をすれば因襲にとらわれることのない自由の天地であった。

以上にみたような本土とは全く異なった諸環境におかれた学校が、他の学校と異なった性格をもっていたとしてもそれは当然のことであつたらう。ある学校がもつ特有のカラーと伝統を「校風」と呼ぶとすれば、札幌農学校こそ最も明確な校風をもつ条件をそなえていたといふことができる。実際にこの学校は明治二十年代末にはすでに独特の校風をもつ学校として全国

にも知られ始めていたのである。

しかし校風というものは、制度などのようにはっきりとした形で提示できるものではなく、学校若しくは学生の一般的傾向を示す言葉であり、その実態を把握することはなかなか困難である。しかもそのような傾向は時代とともに変化するものであり、その理解には多分に精神的な要素が含まれている。それ故ここでは校風意識の形成に深い関係をもったと思われる校友会組織、特にその機関誌を手がかりとしつつ、そこにあらわれた学生生徒たち（農学校では本科生は学生、予科生その他は生徒と呼ばれた）自身の見解から、彼らが何を札幌農学校の校風と意識し、それがどのようにして形成されてきたかを探ってみたと思う。

一 学芸会の設立と「蕙林」

札幌農学校に初めて校友会らしい組織として「学芸会」が設立されたのは一八九二年（明治二五）四月のことであつた。この会は予科の生徒たちが文章の練習を目的として作っていた文友会（一八九〇年九月設立、会員二四名）と同じく演説討論グループの尚志会（一八九一年二月設立、会員三九名）が合併し、これに有志たちが加わって広く校友に呼びかけ会員をつの

ったものである。その主旨は、両会の目的を合わせて文章・弁舌を練磨するとともに、「會員相互の知識学芸を啓発し、校内の風紀を匡正し、一致結合を鞏固にする」ことであつた。會員は予科生徒を通常會員、本科學生を特別會員、卒業生や教職員らを賛助會員とし、農芸伝習科生徒にも會友として門戸が開かれた。すなわち学芸會はまだ全校組織の校友會とはいえず、予科生を主体とするゆるやかな団体であり、入會、退會とも幹事に届出だけの任意加入の自主的なものであつた。明治二十年代には第一高等中学校（一八九四年より第一高等学校と改称）の「校友會」（一八九〇年十月成立）につづいて、第二（五高等）中学校でも次々に同様な校友會組織が作られているが（五高明治24、三高同25、二高同26、四高同28）、札幌農学校の「学芸會」の成立もこれらとほとんど時を同じくしていたのである。しかし他の高等中学校の校友會がすべて一高の例になつたのとは異なり、「学芸會」の場合はそれは直接の關係はなかつたようであり、またこれは前述のように全員参加の組織ではなく、当初は運動部とも無關係であつた。とはいへこの會が文章、弁舌という特定の目的を掲げながら、最初から予科生の大半（一八〇人中一四〇人）を會員とし、これに本科生・卒業生の一部と教師たちの過半が参加したのは、すでに予科内に校友の「一致結合」を求める氣運が醸成されていたことを示してい

る。

札幌農学校の予科というのは、本科に入る階梯として普通学を教授するために開校当初から設けられていたもので、修業年限は最初の三カ年から順次延長されて一八八九年（明治二二）には五年制となつていた。その程度は一八九四年に尋常中学校の卒業生を第四年級（優等生は五年級）に編入させることになつたことからみて、高等中学より一年ほど低かつたと考えることができよう。⁽¹⁾札幌農学校予科内に「学芸會」が結成される雰囲気をつくる上で最も大きな影響があつたのは、予科生たちの要望にこたえて新渡戸教授が毎週土曜日に演武場内で開いていた課外の倫理講話であつたと思われる。農学校第二期生の新渡戸稲造はアメリカ、ドイツに留学のち一八九一年（明治二四）三月に母校の教授として着任したが、当時はすでに農学校内で学生生徒間に最も信望の厚い教師であり、欧米の文学・歴史・哲学についての深い学識と巧みな話術によつて語られる彼の倫理講話は、知識欲に飢える多感な予科生たちを魅了していた。それは後年に彼が校長となつた第一高等学校の場合と全く同様である。この講話には予科生たちの大半が出席し、彼らも各級から互番に代表を出して自分らの所感を述べあい、生徒相互の意志の疎通をはかる上でも大きな効果をもたらしていたようである。新渡戸が日頃から「どうか学校の教官と生徒の間柄をば昔

時の師弟の間柄のようにしたいものだ」と語っていたことも、大半が農学校の先輩よりなる教師たちへの親近感をふかめ、学校内の「一致結合」の気運を促進したとみることができる。学芸会の成立とその後の発展は新渡戸の感化に負うところが多く、彼が会員多数の希望で会頭に就任し、一八九七年（明治三十〇）末の離札までその職にとどまったのは偶然ではなかった。

学芸会の活動としては、毎月一回土曜日に小集会を開いて演説談話と討論を行い、また年二回の大集会において会務の報告を審議するほか、機関誌『蕙林』を刊行することが決められた。役員は会頭のほか予科の各学年から二名づつ選挙される幹事からなり、彼らは庶務、会計、『蕙林』の編集を分担した。

設立当初の役員をみればもとの文友会から三名、尚志会から四名が選ばれ、残りの三名もすべて学芸会設立の発起人で占められていた。つまり学芸会は最初から積極的な活動分子によって組織され、運営されたのであり、この点に学芸会の性格と限界があらわれていたように思われる。しかしそのことによって学芸会は有能な生徒たちに充分な活動の場を提供し、校風の自覚と形成に大きな役割を果たしたのであった。

機関誌『蕙林』（のちに『学芸会雑誌』、『文武会雑誌』、『文武会々報』と改題）は他校の校友会誌と同じく菊判七〇×八〇ページの小雑誌で、当初は隔月刊で出されたが、のちには年

三、四回が普通となった。体裁や組み方も高等中学のそれと同小異であるが、大きな違いは学術（学芸）欄が設けられたこと、論説欄中にも賛助会員や特別会員の寄稿や講演筆録を多く含み、内容も北海道の拓殖のほか実際問題に関する記事がかなりみられることである。そのことは学芸会が予科を中心としながら本科生や同窓生を含む団体であり、さらにこの学校の生徒たちが、社会から「超然」とすることによってエリート意識をもった高等中学の生徒たちとは違って、実社会にも深い関心をもっていたためであろう。『蕙林』には雑録（漫録）、文苑（文芸）、雑報、本会記事その他の欄が設けられたが、予科生たちの思想、趣味が最もよくあらわれていたのはむしろこれらの紙面であった。

二 校風意識の萌芽期

学芸会が成立した一八九二年（明治二五）は、札幌農学校の創立からすでに一五年余を経っていたが、当時はまだ生徒間に自校の校風についての明確な観念はなかったと思われる。『蕙林』創刊号にのせられた「会の価値及大会と小会の利弊」という文章の中で、通常会員の安達幸治郎は「慶応義塾には福沢流の人物多し、同人社には敬宇流の人物多し」と述べながらも、のち

には札幌農学校の校風と切離すことができなかったクラークの名はまだ挙げられていない。それより彼は学芸会においてすぐれた先進者たちの感化を受けることを期待して、この会が「札幌農学校の学風を起すに一大便利を与へたりといふべし」といい、校風（札幌農学校では「学風」ということが多い）の形成を今後に期待しているのである。ただ「札幌に於ける諸協会」を紹介した雑報欄のなかで、札幌の学術の隆盛は東京の華やかさには及ばなくとも「其實に至りては既に一躍北方の希蹤たらんとするの徴あるにあらずや」と、早くも後年における「北方のアセンズ」の気概があらわれているのは注目すべきである。

予科主任の大島正健（第一期生）が「我が先師ウィリアム・クラーク氏」という題で「慷慨熱心なる語調で」講演をしたのは、この年の九月に開かれた学芸会の第二小集会であった。クラークの事蹟が全校生の前で語られたのは恐らくは一八八六年五月彼の死去の際に開かれた記念式以来のことであつたろう。

しかし『蕙林』にのせられたその評は「転た当年の札幌農学校創立者を追憶せしめられたり」という簡単なもので、そこにはまだ彼に対する崇敬の念は感じられない。とはいえ翌年のシカゴ万国博に出品するために新渡戸稲造が執筆した最初の札幌農学校沿革史 *The Imperial Agricultural College of Sapporo*,

Japan の中でも、クラークの農学校創設における功績と学生たちに対する消し難い感化の影響が述べられているのをみれば、彼のことは往時の農学校を懐古する折々には思い起されていたのかもしれない。簡略ながらクラークについての伝記が初めてあらわれたのは、大島正健に私淑していた予科生の安東幾三郎（義喬）が『蕙林』の第一一―一六号（一八九四、九五年）に連載した「ウキリヤム・クラーク」であった。安東は大島の講演に啓発されてクラークに関心をもち、当時札幌に残っていた第一期生数人の談話をえてこの文をまとめたのである。その第一三号中には後に有名になったクラークの別れの言葉が「*Boys be ambitious like this old man*」という形で紹介されている。しかしこの言葉が学生生徒間に広く唱えられるようになったのは一八九八年（明治三一）に校風意識が高まってからのことであり、それまでの数年間には学芸会の機関誌にはクラークの名は全く見当らない。

校風を考える場合に最も容易な指標となるのは卒業生たちの傾向である。『蕙林』第三号の誌上には「先輩の功勲」という一文があり、ここでは「卒業生を出すこと百余名、然れども他校に比して多しと云ふべからず。然かも其成功せし事業に至りては実に少なからざるものあり」として、北海道の拓地殖民、水産における卒業生たちの功績が述べられている。ただこ

これらの先輩たちはまだ有名人ではないためか名前は挙げられず、その功績自体も「人類の功業を量る極で難し。何によりて其の標準を定めんや。故に方に百年の後に其の真価定まるの時を待んのみ」として評価は後世にゆだねられている。この文章は北海道庁予算の削減を契機としてそのころ騒しかった札幌農学校の存廃論を意識して書かれたものであろう。世間には札幌農学校が北海道拓殖の人材養成を目的としながら、卒業生の多くが他府県に流出し、しかも実業から離脱しているという批判があったからである。地元の新聞とくに『北門新報』などは「札幌農学校廃すべし」、「規模を縮めて実業学校となせ」、「予科を廃せ」、「兵学校となせ」などの主張をくり返し、「教頭教授より校中皆アーメン的の木偶を以て充滿せらる」と酷評していた。

このような外部からの批判は学芸会の中にも深い影をおとし、それは文才ある生徒たちの活動の場であった『蕙林』の傾向に対する次のような批判となつてあらわれた。「蕙林発行以来文学の著しく発達するが如き傾向あり……或は恐る、文学的志望の非常に発達するに従ひ終局の目的たる農工を軽視するなからんか」(第五号「賛助会員某農学士の談話」)、「蕙林紙上に現はるゝ文字は過半文芸或は空理空論の類に属すべき者、……努めて実業的の章句を並べ札幌農学校予科内学芸会より発行の

雑誌たるに恥じざるの牀面を保有せしめんことを」(第五号「老婆心」)。一方、この頃は本科の教科が創立以来の教義主義の名残りを払拭して著しく実学的に改編され始めた時期であった。そのことは科学の進歩によって専門教育の必要がますます高まったことのほかに、札幌農学校に対する前記のような批判をかわすことも意図されていたのである。佐藤昌介校長は「実業の発達について」と題する演説の中で「今日の急務は将来実業社会の衝に当り能く業を取るの人を養成するにあり」と強調し(第六号)、また一八九四年(明治二七)の卒業式においても近年卒業生のうちで実業(農業・土木)に従事するものの比率が高まってきたことを喜び、これこそ実業教育の本旨に添うものと歓迎している。

他府県に去つた卒業生たちの各方面における活動が目立つようになつたのは、まさにこの頃のことであつた。なかでも独特のキリスト教思想によって孤軍奮闘する内村鑑三や、雑誌『日本人』を創刊して国粹主義を唱道する志賀重昂が思想界に大きな影響を与え、『求安録』『地理学考』、『Japan and the Japanese』、『How I became a Christian』や『南洋時事』『地理学講義』、『日本風景論』などの著作は非常な反響をもって読書界に迎えられていた。さらに頭本元貞、武信由太郎、早川鉄治、斎藤祥三郎、佐久間信恭などの名が知られるにつれ、世間は専

門以外にも広い教養をもち英文に堪能な札幌農学校出身者たちの異色の活躍に目を見張ったのである。⁽²⁾『蕙林』はすでに第四号から「賛助会員の動静」として同窓の活動を報じていたが、第一四号（一八九五年）からは彼らの著作についての書評があらわれるようになり、時にはきびしいが的確な批評を加えながらも、卒業生たちの名声を喜び、先輩の名誉を後進の名誉として歓迎している。彼らも今や初めて先輩たちの実力を認識し始めたのである。

新渡戸稲造は先にふれた英文による札幌農学校沿革史のなかで、「我校の卒業生は何をなしつつあるか」と自問して次のように述べていた。「彼らの学んだ学問は深くはなかったとはいえ広汎なものであり、そのことは彼らに広い分野で活動する可能性を与えた。……とくに英語の知識は尽きることのない知識の宝庫に近づく上で有用であった。彼らの名前はわが国のあらゆる分野で、至るところに見出される。……彼らの著作も少なく、それを記せば農学・物理学・化学・植物学・工学・歴史・動物学・水産学・地理学・紀行・経済学・文学にわたる長いリストになるであろう」。⁽³⁾もちろん彼は北海道の拓殖における重要な成果が農学校の卒業生たちによることを強調することゝも忘れてはいないが、彼はすでに札幌農学校の特色を農工の分野にとどまらず社会の多方面への人材の供給にあることを指摘

していたのである。彼が多忙な職務にも拘わらず予科や本科の学生生徒たちのたつての願望にこたえて英学協会を設け、哲学講義のほかギゾーの『文明史』やカーライルの『フランス革命史』、『サター・レザータス』などを講読し、また農学校生に適当な英文学の教科書がないとして自ら欧米の文学者、政治家、経済学者の農業、農学に関する詩文、金言を集めて *De Re Rustica* という本を編集したのも、社会の唯物的傾向を憂えたことのほかに、以上のような農学校の伝統を維持したいと願ったからであろう。すでに人文学の科目が皆無に近かったこのころの札幌農学校において、欧米の文学や哲学への関心が著しく高まったのはこのような新渡戸の努力によるものであった。

卒業生たちの活躍が知られるにつれ、札幌農学校では学芸会を中心に学生生徒たちの間で自校の校風についての意識が少しづつ形成され始めたようである。なかでも『蕙林』第一〇号（一八九四年三月）にのせられた「覚悟はいかに」と題する予科生徒伊藤肇の巻頭言は、最初の校風論として特筆すべきものであった。彼は「我札幌農学校は日本における人物の一大養成所なり」と断言したのち、この学校が徒らに官吏、学者、教師を作り本来の目的である実業家を養わず設立の精神と国民の輿望に反すとしてその無用を唱える世論に対して、「吾人は世人が喋々囁々として我校に望むに唯一種の人物養成を以てするに於て

は其狹隘偏頗なるに驚かずんばあらず」と反論し、「吾人は唯將來日本の威を輝すに足るの偉大なる人物即ち『世界における日本人』の出でんを望む」と書いている。熊本出身の伊藤は同志社を卒業したのち前年夏に予科五年級に編入したばかりの人であり、恐らくは当時知られ始めた農学校卒業生たちの異色さにひかれて札幌へやってきたものであろう。⁽⁴⁾ それだけに札幌農学校の特色については従来⁽⁵⁾の在校生以上に信ずるところが深かったと思われる。そのことは、「我校の学風は些も内地諸校に劣らざるものあるべし。されど全国の模範として他校の崇拜する所となるは尚未だ近からず」と控えめに書いた安東幾三郎の巻頭言（第一四号）と、次号にのせられた次のような伊藤のそれを比べれば明らかである。

我札幌農学校は始めより一種特別なる学風を有し、（人物養成と技術教育の）両分子の配合其宜しきを得たるが如し。

是れ本島〔本土のこと〕に見ざる所なり。我校の歴史を知るものは、如何に我校が教育界変動し、学風亦幾転遷するの間にありて、独り其特殊の学風を存せしかを見るべし。是れ我輩が他に向つて竊かに誇称せし所たり。

即ち伊藤は、札幌農学校が創設の当初から専門技術のほかに広い教養を兼ね備えた人物を育成してきたところに、特殊な校風を見出したのである。しかしこのような意識は当時はまだ例

外的なものであった。

三 校風の自覚過程

一八九五年（明治二八）十月、学芸会は秋季大会において本科生と予科生とともに通常会員とする新学芸会の発会式を行い、機関誌も第一九号から『学芸会雑誌』と改められた。一八九三年以来予科の新入生募集が中止されたので、予科はいまだ第四、五年の兩級を残すにすぎず、従来は特別会員として会務に参加しなかった本科学生の協力が必要となつたのである。そしてこの時の本科最上級は学芸会設立時の予科最上級生たちであつた。本科、予科の各学年から二名づつ選ばれた新幹事二名の顔ぶれをみれば、これまで『蕙林』で活躍してきた最良のメンバーがそろえられている。⁽⁵⁾

もともと予科の縮小は、札幌市内にはすでに北海英語学校中学科や北鳴学校のような私立の中等学校があつたので、農学校の校費削減のために下級の一、二年級を廃止したものであつた。さらに一八九四年には全国の尋常中学校および特定の私立学校の卒業生を成績により予科四年若しくは五年級に編入することになり、翌年には三年級も廃止されたのである。一八九五年四月には札幌農学校は漸く文部省の直轄学校となり、これま

で幾度か取沙汰された廃校の懸念はなくなったものの、制度的には縮小の憂き目にさらされた。即ちすでに決定していたことではあるが農学科とともに本科を構成してきた工学科が廃止されたばかりか、文部省は予科を全廃して本科の入学資格を尋常中学校卒業程度とすることを指示し、校則改正を命じたのである。かくて一八九七年には予科は一時姿を消すに至ったが、この予科の廃止問題は農学校の学課程程度に関する変革であり、学生たちの自負と校風観の形成に大きな影響を与えた重要事件であるから、いまだ詳しくこのことにふれておきたい。

これまで文部省の管轄する一般教育の域外にあって独得の学制を保持してきた札幌農学校を、文部省がその管理下におくすれば、これを単科大学と認めるか高等学校と同格におくかはなかったであろう。しかし前者は帝国大学が一所しかなかった当時においては論外のことであり、一方このころの高等学校は名目的には大学予科よりは専門学部（医学部、薬学部など）が主体となっていた。文部省がこれと歩調をそろえるために札幌農学校の入学資格を下げて「貴校ノ学科程度ヲ低ク⁽⁶⁾」することを求めたのは当然のことであったといえる。しかしこのことは、尋常中学から予科四、五年級への連絡がつけられたとき「之を高等学校を経て大学に至るものと比すれば年限相似たり、只学科の高下は世評に任せん」（『蕙林』第一七号雜報欄）

として、自校と帝国大学の修業年限の類似に満足していた農学校の学生生徒らにとっては晴天の霹靂であったに違いない。農学校当局は予科の全廃はやむなしとしながらも、なお学課程度を維持するために本科の一年延長と学士号授与の維持を文部省に申請し、あるいはまた本科に入る階梯として「中学補修科」の設置を求めたが、学位の件以外はいずれも認められるに至らなかった。「明治三十年授業初めの感」と題する『学芸会雑誌』第二二号雜報欄の記事の中で、「（予科講堂における）校長の演舌は沈痛なり、彼は人物修養を熱心に説けり、教官諸氏の申述は冷々たり……学生諸氏は沈黙たり」と書かれているのは、この年をもって廃止される予科の重苦しい空気を伝えているのであろう。⁽⁷⁾

しかしながら以上のような札幌農学校の専門学校への格下げの危機は、『学芸会雑誌』にみる限り、学生たちの意気を銷沈させるどころか却って彼らの自覚を高め、愛校心を燃え上せたように思われる。それはこのころの学芸会員たちの多くが本科の学生で、彼らはすでに学問の分野では大学教育を受けているという自負があったこと、また卒業生たちの活躍が彼らを勇気づけ、この逆境にのぞんで創立以来の自校の美風が強く意識されたことによるものであった。次にみるようにこのころから自校を「大学」と称する文章が数多く誌上にあらわれたことがこのことを物語っている。

「(本校を)大日本の北方^{イナキス}アセンズに於て一個の純然たる大学に擬^{なぞ}ふるものあって何の不可あらむ」(第一六号)

「博學達識なる五教授を頭に戴く、すでに世界の大学たるに恥じず……学生は自重心を以て起て、自覚心を三千世界の大学生を以て居れ」(第二号)

「駒場農科大学(帝国大学農科大学のこと) 祝融の災に罹る、帝国農学界の爲めに悲まざるべけんや、遮^{さへらば}莫^なれ、札幌尚一大学を存す、不幸中の幸」(同上)

札幌農学校では一八九四年(明治二七)九月以降、本科三年級以上の学生に農學、農芸化學、植物病理學、農業經濟學のうちいずれかを専攻させ、演習、実験を課して課業の専門化をはかっていた。特にドイツ式の「演習」の導入は我が国における最も初期のものといわれ、専修科制の採用に伴い内容も著しく高度化したのである。これとともに学生たちの課外における研究活動も活発になり、従来からあった札幌博物学会や史学会などのほかに各専修科ごとに農学会、かめら会(農経農政)、舎密会(化學)等の學術研究会が作られ、定期的に外国雑誌の輪読、新著紹介、研究発表を行い、それらの活動は逐一『学芸会雑誌』に報告されていた。卒業論文もますます専門化し、卒業式において講評されるその内容も実質的に大学の名に恥じなかったことは認めねばならない。さらにこのころには東京の榮華

房から札幌農学校関係者たちの著書を「札幌叢書」として刊行する計画がすすみ、そのことはこれまで知られることの少なかった農学校の学問的實力を広く学界に示すものとして学生たちに歓迎されていた(これは叢書名をつけないまま一八九八年から学芸会蔵版として刊行を始め、一九〇三年現在の著作は三〇冊以上にのぼっている)。もつとも一八九五年末までには農学校の卒業生たちは、すでに同年秋の新卒者を含めて一七〇人(死亡一三人を含む)中三九人、即ち約四人に一人が著訳書をもっていたのである。⁽⁸⁾学芸会の活動家の一人であった在校生菅菊太郎の『日欧交通起源史』が新渡戸稲造と志賀重昂の序文に勝海舟の題字をつけて刊行されたのもこのころであった。

以上のような自信に支えられて、母校の格下げの危機に直面した札幌農学校の学生たちの間に自校の特色を省みて校風論が起ってきたのは自然のなりゆきであった。「我校の世に聞えざること久し、力余りあって而して深く自ら韜晦する人或は之を大なるものなりと云はん、然れども之を国家の上より稽^{かたが}へ之を世界の上より考ふるに於て、我校の而かく洵明の古風を追ふは決して慶事とすべきに非ざるなり」(第二四号雜報欄)という『学芸会雑誌』の記述は、恐らく当時の学生たちの氣持を代表するものであったろう。このような中で同誌第二二二号(一八九七年四月発行)中にのせられた「校風の發揮」という文章

は、「校風」を標題にとり上げた最初のものである。しかしこれは「先輩のなすところをみては、吾等の心を強くするに足るものなきにしもあらず」といいながらも、なお農学校に校風の振わないことを嘆き、「校風は造らんとして左思右慮するは策のえたるものに非ず、学業に勉め感情的意志的修練を心懸くにあり、然らば校風自らなるべし」と結んでいる。この年十月の学芸会秋季総集会で「校風振興論」の弁舌を振った菅菊太郎も「農学校は敢て農学校に止まる可からず、啻に北海道の人物に止まる可からず、日本的人物を以ても甘んず可からず、進んで世界的の人物たる可し」と述べながら、まだ農学校の校風がいかなるものであるかには及んでいない。これらをみれば一八九七年（明治三〇）末ごろまでは札幌農学校では校風の観念はまだ漠然と同窓生の活躍のなかに求められていたようである。

ところが翌一八九八年になると校風観に大きな発展がみられた。その年の一月十五日には学生懇談会と称する愛校演説会が「突然に」催され、蠣崎知二郎、森広、草場栄喜、角田啓五郎など学芸会の有力メンバーであった七人の弁士たちが代る代る壇上に立って「吾校は創立の当初より海内無双の学風あり」と気焰をあげたのである。ここでは農学校には開校以来すでに誇るべき校風の存在することが強調されており、先に記した伊藤肇の主張が共通の意識となってきたことを示している。このよ

うな校風意識の高揚は、農学校当局と卒業生たちの努力によってこのころ予科復活の曙光がみえてきたことと関係があるのかもしれない。⁽¹⁰⁾ 次いで『学芸会雑誌』第二五号（一八九八年二月発行）の巻頭を飾った「明治戊戌の春を迎えて希望二つ三つ」という論説の中では、前記の菅菊太郎が校風の自覚どころかその維持を訴えて次のように書いている。「我札幌農学校の創立者ウィリアム・クラーク、学生の精神教養を以て主要の課目となし、即ち出ては勇壮なる運動を試み入っては高妙なる明徳を説く、所謂法三章にして……今是如何、法三章にして止まん哉、規則濫発の弊漸く堪へざらんとす、噫々是れ誰の罪ぞや、然れども我が校が生るゝと共に得たる学風は今猶ほ昨の如きのみ、如今帝國大学其他の高等学校に於て学生の風儀漸く墮れんとするに際し、独り我校は天稟の絢爛たる学風を保全して天下教育会の師表たらざるべけんや」。ここで「法三章」というのは、農学校創設のとき開拓使の官吏が作成した学生規則に対し、クラークが「このような細則よりはBe Gentleman⁽¹¹⁾で足りる」と述べたというエピソードをさすものであるが、今や農学校の校風の特色をたどる中でその淵源が初代教頭クラークの中に見出されたのである。しかしそのことは菅が最初ではなく、彼はこの年の一月二十八日付『北海道毎日新聞』にのせられた「札幌農学校と其学風」という記事から次のような文章を引用

している。

クラーク氏は米国有数の人物にして学生^のの精神修養に重きを置き、大に開導する所あり……蓋し札幌農学校に朴直勤勉の学風あるは遠く是に胚胎するものとす。……当今東京辺の学生界風儀墮落の時、農学校が卓然として出藍の誉を得んと欲せば、宜しく固有の学風を維持せざるべからず。

この記事こそは札幌農学校の校風をクラークと結びつけた最初のものであるが、それはとても新聞記者の発想によるものとは思われず、恐らくは安東幾三郎か菅自身若しくは前記の弁士たちの誰かが寄稿したものに違いない。いづれにせよ、農学校が世間から実力以下にみられ、さらに専門学校への格下げに直面したときに、彼らは「我札幌農学校は已往に於て幾多の人物を出し、且又現在の学生も質朴と勤勉を以て学事に熱中し、海内罕^{まれ}に見る良学校」であることを強く意識し、同窓と一体になつて校風をもちたてるために結束し始めたのであった。このようなかで同年の四月から五月にかけて学芸会の新旧幹事たちが分担し、母校の沿革、制度、校風を広く世に知らしめるために僅か三十余日⁽¹²⁾をもつて書きあげた本が『札幌農学校』と題する記念的な出版物であつた。『学芸会雑誌』第二五号はこの企画について「我校は美なる歴史を有せり、我校は偉なる将来を

胎めり、以て雄を四海に張るべく、以て威をば紱に樹つべし。何ぞ踟躕として永く北海の四隅に屈せんや……我校の真なるヴァリュエーの社会に紹介せらるゝの時なるを知り、此冊子の前途を祝す」と記している。

『札幌農学校』は単なる学校の紹介書ではなく、札幌の自然と農学校の校風を雄渾な漢文調で高らかにうたいあげた頌詩であつた。執筆者たちはいずれも予科時代から『蕙林』、『学芸会雑誌』で活躍してきた文才ある人々であり、彼らは愛校の情熱をもつて筆を振つたのである。この本はすでに菅の著書を出し、「札幌叢書」を準備しつつあつた東京の裳華房から出版されて三版を重ねたが、そのことによって札幌農学校の独特な校風は全国に広く知られ、その後の農学校学生^ののなかには本書にひかれて札幌をめざしたものが少なくなつたのである。

文部省が農学校の予科問題についての従来の態度を改め、本科に入る階梯として新たに中学卒業程度を入学資格とする二年間の予修科の設置を認めたのは五月三日のことであつた。この決定により農学校の修業年限は官制的にも帝国大学と肩を並べることになったのである。時恰も『札幌農学校』編集の最中のことであり、学生たちは早速巻末に「札幌帝国大学設立の必要を論ず」という一章を追加し、その中で「列強有名の大学は必ずしも其首府に在らずして、反て偏僻の地に多き所以のもの、

教育の中心と政治の中心とは相一致するを要せざるを見るに足らん。吾人は信ず、我北海道は実に学問の地たり」と自信の程を示している。また『学芸会雑誌』第二十六号の雑報欄も「回顧すれば、予科維持の爲めに尽瘁^(苦)せる当局者は過ぐる数年間辛惨を重ね、出身者は本校休戚のある処を知りて極力赤誠を己倒に策し、在学の学生は朝夕愛校の涙に潤びしが、果然北海大学の曙光茲に開けり。吾人は此祥報を齎らすに当って腋下自ら意気の万秋なるを賞ゆ」と記している。この号の雑報欄担当者^(註)は当時本科一年級に在籍していた有島武郎であった。

四 校風觀の成立

明治期の各高等学校の校友会誌には、学校によっていくらかの違いはあるが、最初から多くの校風論が掲載され議論されている。それは家に家風あり、国家には国風があるように、学校にも校風ならざるべからずという前提から起った校風確立論で、やがてこのために初代校長の訓示や好ましい伝統、風土性などの中から「四綱領」、「勤儉尚武」、「自由自治」、「雄大剛健」、「超然」、「剛毅朴訥」などのモットーが選ばれ、それが一種の規範として「校風」と唱えられるに至るのである。札幌農学校の場合はこれとはやや趣を異にしており、学芸会設立の当

初はほとんど校風論らしいものはみられなかった。しかし文部省による農学校の格下げの危機は学生たちに母校が實質的に大学であることを自覚させ、それとともに幾多の異色の卒業生たちを生み出してきた創立以来の美風を想起させたのであった。それでは彼らが自校の校風とみなした美風とはどのようなものであったろうか。

一八九八年(明治三十一)六月刊行の学芸会編纂『札幌農学校』は農学校の校風を天下に示すために書かれたものであり、その中では札幌の自然、学校の沿革、学生生活などを紹介しつつ、随所に彼らが自校の美風とみなした伝統が力説されている。これ以前にも折にふれて、農学校が人物養成に特徴をもち、「師弟の和親なること」や学生の「質朴勤勉」であることがのべられていたにせよ、本書はそれらを集大成した感があり、またその依って来た由来を明らかにすることによって、札幌農学校の校風觀を完成したとみることができ。これ以後時代が推移して農科大学、北海道帝国大学となったのちでも、自校の校風をのべる際には本書は常に座右の書となったのである。そこで本書にあらわれた校風觀を言外の意味も汲んで整理すれば次のようになるであらう。

(一) 勤勉朴直 これは第一期生たちがクラーク教頭から受けた感化の影響が順次後進に継承されて、「今は平乎として抜くべ

からざる」学風の一つとなったものである。

(二) 学生の自主性 これも学生たちを細密な規則で縛ることを好まず、終始法三章をもって彼らの自由を尊び、その自修を重んじたクラークの薫陶に発する。

(三) 師弟の關係の親密なこと このことも日頃から言語応待に隔壁を設けず好んで学生らと接触したクラーク以来の伝統である。さらにその後校長、教師たちのほとんどが農学校出身者で占められたこの学校では、師弟の間柄に他校とは全く異なった家族的雰囲気がある。

四 校友の親睦なること 農学校には他校にみられるような上級下級の差別がなく、本科生・予科生・伝習科生に至るまで友人兄弟の如く相接している。

(五) 精神的修養 専門以外に宗教、文学、思想の書に親しむことは、開校以来の伝統であり、そのことと相俟つて雄大で原始の佛を残す札幌の自然が彼らの思索を深め、農学校の学生に概してみられる品行方正、志想純潔の性格を形成した。

『札幌農学校』は以上のような自校の校風を挙げるに際し、それらが「他校の得て模すべからざる英風」であることをくり返し述べていることも特徴的である。このことは当時の新聞で騒がれていた学生墮落論を強く意識したものであろう。『学芸会雑誌』第二七号（一八九八年十一月）にのせられた漫録欄

の記事の中でも、「凡そ都下十萬の学生、遊蕩放逸、花に月に一日の快を知りて、國家の相続者たる自分を顧みざる時に當り、札幌農學一百の健兒や孜々屹々、案に凭りて勤學晝夜を捨てず……」と書かれているが、これをみれば農学校の校風は自校の危機を契機とし、紊亂した東京の学生風俗との比較において自覺されたというべきかもしれない。それゆゑ僻遠の地札幌では、この地に遊學する清貧孤獨の学生たちは華美怠惰に陥る誘惑も少なく、雄大で奥深い自然に囲まれて靜かに讀書にふけることができ、創立以来の伝統である質朴勤儉の生活に甘んじつつ、親密な友情と師弟關係のもとで一つの家族をなして勉學にいそしんでいる、と意識されたのである。それはまさしく、のちに恵迪寮々歌「都ぞ弥生」の中で謳われる「人の世の清き国」であつた。

ところで農学校の校風が創立以来の伝統として認識されたとき、その淵源が第一期生たちに強烈な人格的影響を与えた創設者クラーク教頭に求められたのは当然であつた。このことにより札幌農学校の学生たちは、今や彼ら自身も慶応の福沢諭吉、同志社の新島襄に匹敵する開學の祖をもつていたことを初めて自覺したのである。しかも彼が帰國に際して学生たちに残した言葉は、夢多き青年たちに千古不易の響きをもつていた。『札幌農学校』の巻頭にのせられた「Boys be ambitious」はその後「札幌

幌農学校学生の相與に永く念誦する所のもの」となったのである。この言葉は前述のように一八九四年に安東幾三郎が最初に紹介した時は末尾に「like this old man」がついていたが、一般的モットーとなるためにはこの部分は省略する必要があったのであろう。⁽¹⁵⁾ このようにクラークの事蹟は『札幌農学校』によって農学校の校風との関連で紹介されたが、同年九月には早くも「労働世界」紙が本稿の冒頭に掲げたようにこの本を批評し、クラークによって育てられた札幌農学校の校風を賞讃している。筆者は我が国における労働運動と社会主義の先覚者としての中には国際的にも知られる片山潜であつた。⁽¹⁶⁾ それ以後クラークの名はすでに教育界で活躍していた同窓生たちによって教え子に伝えられることが多く、特に多数の信奉者をもつ内村鑑三の講演や著作の影響で全国的に広く知られるに至つたのである。

一方農学校内におけるクラークの評価も、『札幌農学校』の刊行によって決定的なものとなり、学芸会は本書の出版剰余金をもつてクラークの肖像画を演武場にかかげ、また一八九九年（明治三二）四月には札幌基督教青年会の学生たち（代表は森広）によって「第一回クラーク博士記念会」が盛大に開催された。この青年会は同年中に「禁酒禁煙」を入舎条件とする「青年寄宿舎」（現在も存続）を設立したが、これもクラークによって植付けられた伝統を維持し、学生の淳朴な風紀を保つこ

とを目的としていた。このような中で一九〇一年（明治三四）に迎えた札幌農学校の創立二十五周年の祝賀会は、すでに新しいキャンパス内に新校舎の建設がすみ、大学昇格運動が著しく盛りあがっている中で行われたこともあって、札幌始まって以来の盛大な祝典となった。式場となった演武場の二階には黒田清隆、クラークの肖像と開校式における演説が掲げられたほか、正面上段には農学校の校章をはさんで Boys be ambitious の英文字が飾られた。祝詞のなかでもクラークの功績にふれたものが多く、彼はすでに札幌農学校の校風と発展のシンボルとなつていたのである。

しかし一般に校風と称されるものは望ましいとされる理想の姿であつて、現実を指すものではない。そのことはすでに存在している伝統を校風として自覚した札幌農学校の場合でも例外ではなかった。さらにその校風は「原始的、太古の風」があつた小人数の時代に生れたもので、当時の農学校は昔日のそれではなかつたのである。校風観の成立から数年を経ずして校風の衰退が叫ばれ始めたのはそのためであつた。

『学芸会雑誌』第三二号（一九〇〇年六月）には、森本厚吉が「新渡戸先生を追憶し所感を綴る」と題する長文をのせ、その中で「日本国中比類を見ざりし誠直高潔の校風をもつ昔日の札幌農学校」をふり返つたのち、「憂ふべき哉今日の札幌農

学校」として次のように述べている。「愚鈍余の如くにして尚ほ農学の一端を知り、土地を耕肥し、キャベージ大根を選種し、播下し、施肥し、除草し、収穫し、是を市場に出して十分の利を得るの方法と其原理を了しぬ。……然りと雖靜に顧るに、驚く可し頭腦はキャベージの如く、身体は大根の如くにして糞尿の臭気紛々たる甚し。而も或人曰く、『汝驚く勿れ、是れ教授連多数の多年の目的の達せるなり』と。嗚呼是れ果して真か。恐らくこれは、『農学校の課程は國家に有益なる人材を養成するために、農學に偏せずそれ以外の課程をも重視すべきこと』（『學芸會雜誌』第三三三號）を離札の直前まで説いていた新渡戸稲造が去ったのちの、農學校の實學偏重の傾向を批判したものであらう。例えば南鷹次郎教授は「徒らに普通教育的思想、或は文學的觀念を増長せしむるが如き昔日の弊風は社會の氣運に反す」と述べ、初期の農學校が多方面に俊秀を輩出しこれを校風としたように、今後は農業の先覺者たるを以て校風とすべきことを力説していた（『學芸會雜誌』第二六號「所感を述べ」）。當時はこのような主張が農學校内の主流となっていたのである。

札幌農學校における教養主義と實業主義の二つの傾向の葛藤は、前にも述べたように早くから學生間にもみられたが、今では學芸會の編輯部にも及んでいた。『學芸會雜誌』の發行が一年

近くも中断されたり、幹事の交代によって編輯方針に変化がみられたのもこのためである。一九〇一年九月、學芸會は遊戲會や運動各部と合体して文武會の第一部となり（翌年九月には學芸部と改稱）、機關誌も第三五號から『文武會雜誌』と改められた。學芸會はすでに一八九八年の春季總會で本科、予科のほか農芸伝習科、土木工學科の生徒をも普通會員としていたが、文武會は校長を會頭とし新設の森林科を含む全員參加の校友會に發展したものである。その性格がこれまでの有志による學芸會と異なつたのも当然であつた。従来から『學芸會雜誌』について「少數の操筆者一味」が独占しているとの批判がたえなかつたが、このころになると學芸部の委員會においてさえ英才のある學生たちの投稿を没書にする傾向が起つてきたのもこのためであらう。そして遂には「文武會雜誌は會員が其抱負を述べ、其意見を吐露して以て校風の改善を計り、知育徳育の進歩を計らんが爲めの一機關なり」という一部の委員たちの主張を卻けて、この雜誌は第四二號（一九〇四年六月）から『文武會々報』と改題され、「會報と題すれば會の出來事を掲載すれば既に足る」という「會告」がそのままに實施されたのであつた。このようにして嘗ては「筆力縦横、宛がら神あるに似、筆端の風雨は雲濤を賀するもの」があつた機關誌も、いまでは「杳として又昔日の氣焰揚らず」、校風に関する論說も一時は

ほとんど姿を消したのである。文武会学芸部の不振とともにみられた当時の学生気風の沈滞は、国会両院の決議によって札幌農学校の大学昇格が期待されていた矢先、一九〇三年に布告された実業専門学校令が農学校を他の専門学校と同格においたとき、これに対する反応が何ら起らなかったことから察せられる(『文武会雑誌』第四一号「切齒録」、「楽天なる哉心事」)。

さらにまたこのころは東京の学生風俗が漸く札幌にも波及して、風紀の紊れやカンニングについての悪評が流れ、「同窓相集まれば則ち慨然として談此事に及ばざることなし。或るものは札幌の疾風終に地を払へるかと泣き、或るものはクラーク先生地下に泣くべしと嘆く」(『文武会々報』第五二号)という有様であった。それゆえ『文武会々報』にも再び「此際紙面を改良し主として精神修養となる論説を掲げる」ことを希望する意見があらわれ始めたのである。

しかしそれ以後札幌農学校次いで東北帝国大学農科大学において校風唱導の中心となったのは、文武会よりはむしろやがて予科生の寄宿舎となった恵迪寮であった。⁽¹⁷⁾一九〇五年に新築移転した新寄宿舎の「寄宿生規約」の冒頭には「寄宿生ハ学風ノ發揮者タリ、擁護者タルノ責任ヲ自覚」することが求められ、食堂にはクラーク教頭の肖像画(以前演武場にあったもの)が掲げられて、「日夜先生と接する吾等舎生は、最も崇敬する先

生が与へられし立派な感化と美しい校風とを自覚して充分なる耻しからぬ人格を養ふべく努めつつ」あったのである(『文武会々報』第四六号)。まもなくかつて「学芸会」で活躍した森本厚吉や有島武郎が教師として着任し寄宿舎係となったとき、彼らが舎生たちに与えた深い精神的感化は、往年の「学芸会」における新渡戸稲造の場合と類似していた。

結 語

以上述べてきたことから、札幌農学校における校風観の成立について次のような結論が導き出されるであろう。

(一) 最初の校風意識は、初期の教育課程が生み出した広い教養と英語力をもつ卒業生たちの異色の活動によって啓発された。

(二) 札幌農学校における校風観は、文部省による格下げの危機に直面して、学生たちが創立以来の自校の美風を自覚したときに形成された。その際に校風の淵源として想起されたのが初代教頭のクラークである。

(三) 校風観の形成のうえで決定的な役割を果たしたのは、自主的な校友会組織の学芸会であった。この会の成立と傾向は新渡戸稲造の教養主義に大きな影響を受けていた。

(四) 農学校の校風として意識された特徴は、豊かな自然に囲

まれた、僻遠の地の、程度は高いが、小さな学校にふさわしい内容をもっていた。

(5) 教養主義に対する実業主義の優位が校友会誌に及んだとき、それがこれまでもっていた校風推進の役割は失われた。その役割はやがて恵追寮によって引継がれる。

ここでは主として校友会誌からみた校風観を検討してきたが、他の学校と比較した場合札幌農学校はこのほかにもいくつかのきわ立った特徴をもっていた。それはクラークが残し、独立教会となって結実したキリスト教の伝統であり、遠友夜学校にみられる社会奉仕の精神であり、遊戯会その他の行事における市民との交流であり、各地の水害、津波、饑饉などの際の救済活動、慈善音楽会や幻燈会にみられた社会参加の姿勢等々である。これらは改めて考察すべき課題であるが、独立教会や青年寄宿舎が現在までも存続し、新渡戸の設立した遠友夜学校が学生たちの奉仕によって太平洋戦争末期まで続けられたことなど、札幌農学校に根付いた土着の精神はしたかな根をもっていたように思われる。

〔注〕

(1) しかし高等中学側ではそのようには認めず、農学校予科卒業生を編入する際には無試験ならばその予科最上級、試験を受けても本科一年級に入れるのが普通であった。

(2) 例えば後のことにはなるが、川上瀧弥、森広共著『はな』(一

九〇二年一月豪華房刊)を書評した『万朝報』紙は「札幌農学校からは不思議に変物(異材)が輩出するようである」といい、また『新愛知』紙も「由来札幌農学校は異色殊質の人を出すを以て特に世人の記憶を強うせし所なり」と述べている。

(3) Niiobe Inazo, *The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan*. Sapporo 1893, p.29

(4) 伊藤は一八九七年(明治三〇)七月、農学科第三年級のとき惜しくも肋膜炎のため死去した。有島武郎も日記のなかでそのことにふれている。

(5) 本科第四年級 成田軍平 大脇正諄

第三年級 時任一彦 三輪龍揚

第二年級 伊藤 肇 山田玄太郎

第一年級 安東幾三郎 湯浅正夫

予科第五年級 川上瀧弥 西川光治郎

第四年級 星野純逸 芳賀録五郎

(6) 『北大百年史 札幌農学校史料』(四二六ページ)

(7) 佐藤校長は文部省に宛てた「札幌農学校拡張意見書」の中で、このような情況を「実ニ現今本校其四圍恰モ一抹ノ陰雲ヲ以テ之ヲ閉塞セルモノニ似タリ」と述べている。前掲書四七一ページ

(8) 『札幌農学校同窓会第五回報告書』(一八九六年十二月刊行)一五一一七ページにそのリストがある。

(9) 『有島武郎全集』叢文閣版第一二巻九八―九九頁。有島はこのような昔の主張に疑問を感じ、同じ集会で述べられた佐藤校長の「農学校出身者中北海道の内地不毛に入りて大に為すの人なきを嘆し、

(10) 文部大臣西園寺公望は、一八九七年暮に陳情のため上京した佐藤校長に予修科等の設置を必要とする理由書の提出を改めて求めたようである。『北大百年史 札幌農学校史料(一)』四六七—ムジ参照。

(11) この日付の『北海道毎日新聞』には引用の記事は見当たらない。日付もしくは新聞名の誤りか。

(12) 『札幌農学校』の例言にはこのように書かれているが、編纂はすでに一月中旬には始まっていた。『学会雑誌』第二五号、七六ページ。

(13) 有島武郎は一八九七年暮の日記の中で予科廃止の問題について次のように書いている。「新規則に依れば、中学校卒業生をして直に本科一年に編入するの有様となれるなり。即ち中学卒業生が四年の後に至れば直に農学士たるを得るものとす。世間豈此理のあるらんや。『全集』第一巻、一二七ページ

(14) 一八九七年の夏期休暇に帰省した有島も「余は帰京後学習院学生を見るに、多くは優柔不断にして軽薄極れるもの多く、或るものゝ如きは人をして嘔吐を催さしむる事あり」と書き、さらに弟王生馬の挙動をも非難している。別の箇所には一高生に対する批判もみられる。『全集』第一巻、七〇、八五ページ

(15) 近年になって逆に「Boys be ambitious」の後に著しく倫理的な色彩を帯びた長文の言葉を付したものが世間に流布しているが、これは一九一五年のサンフランシスコ万国博のために編集された英文の東北帝国大学農科大学略史に起因している。本書の筆者は恐ら

くは当時予科の英語講師をしていたジョージ・ローランド師で、これはクラークの言葉を解釈したものである。『A historical Sketch of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University; what America has done for a Japanese Government College. Edited by the Committee of Publication, Sapporo, 1915. p. 10 をみよ。』

(16) 片山潜と札幌農学校学生たちとの関係については、本書中の松沢弘陽教授の論考「札幌農学校と明治社会主義」を参照されたい。

(17) 一九〇七年に農科大学に昇格したものの『文武会会報』は、従来と違って著しく文芸雑誌的なものとなった。しかしこれは他校の校友会誌にも共通の時代の傾向であった。

(北海道大学附属図書館北方資料室主任)